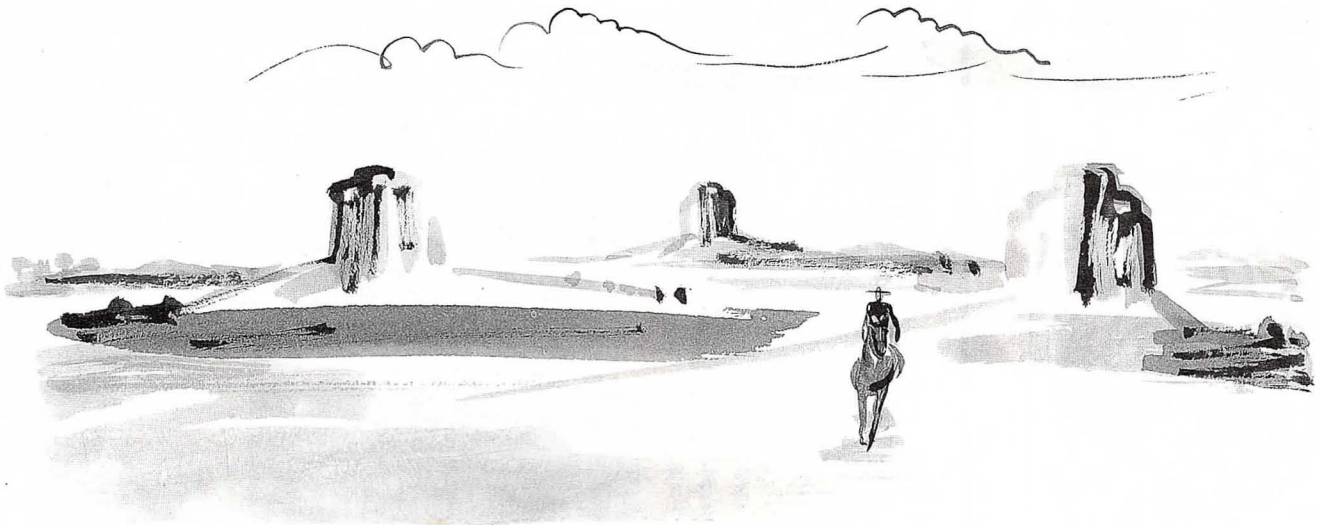


CINEMASCOPE COLUMN

スクリーンの中の美容 5

TEXT/HIROMI KANAMARU
ILLUSTRATION/TOSHIKO EHARA



身だしなみで予感させた “人生の転機”

ケヴィン・コスナーの『ワイアット・アープ』(WYATT EARP/1993年)、カート・ラッセルの『トゥームストーン』(TOMBSTONE/同年)、ジェームズ・ガーナーの『墓石と決闘』(HOUR OF THE GUNS/1967年)、バート・ランカスターの『OK牧場の決闘』(GUNFIGHT AT THE O.K. CORRAL/1957年)、ヘンリー・フォードの『荒野の決闘』(MY DARRLING CLEMENTINE/1946年)……

いずれも、実在の保安官であったワイアット・アープが主人公となった、西部劇である。トゥームストーンという名の街で、ワイアット・アープとその兄弟がドク・ホリデーの協力を得て、無法でならずクラントン一家とOK牧場で決闘をする。決闘の舞台になるトゥームストーンという街は、『墓石』という意味だが、もともと銀鉱で栄えたところである。全米から一獲千金を夢見た人々が集まってくる。まだ、街の秩序など整ってはいない。銃声と暴力がまかり通る、そんな街である。このトゥームストーンに旅してきた、ダッジ・シティの元保安官ワイアット・アープは、再び保安官の役につき、街を闊歩するクラントン一家と対決することになるのだ。

ところで、いくつかのワイアット・アープの原タイトルを見ると人名や地名、あるいは対決そのものを示す直接的なものになっているのだが、名作といわれるジョン・フォード監督の『荒野の決闘』だけが、『いとしのクレメンタイン』という、およそ西部劇らしくないタイトルになっていることに気づく。

そして『荒野の決闘』のアープ(ヘンリー・フォード)は、荒々しい面もあるものの、純情で子供っぽい性格の男として描かれているのが面白い。この『荒野の決闘』の中では、冒頭の、アープが兄弟で牛追いをする旅の途中にトゥームストーンに立ち寄って一つの生

活の区切りをみせる場面が、特に印象的に作られている。その場面に出てくる、アープが身だしなみを整えるシーンが、のどかな西部の街のひとつときといった風情を醸し、クライマックスの決闘とはまったく対照的なのだ。

これはフォード映画の中においても、最も有名なシーンの一つだ。まだ秩序が整わず、街には暴力がはびこっていたものの、しかし一方には、今にはない精神的豊かさがこの時代の西部にはあったという、フォード監督のメッセージの一つなのかも知れない。

その象徴として描かれるのが、実は「バーバー」、つまり床屋のシーンなのだ。

アープは牛を追いながらカリフォルニアに向かう長い旅の途中で、牛の番を一番末の弟に任せ、二人の兄弟を伴ってトゥームストーンに立ち寄る。そこで、まず最初に行くのがバーバーなのである。長旅で伸びてしまった髭を剃ろうというわけだ。街で一軒のバーバーを見つけると、兄弟で入る。

「何をさしあげましょうか?」と言うバーバーの親父の声に、アープは理髪用の椅子に腰掛け、「髭剃りだ」と言う。

「髭はどうしましょう?」と親父。

「髭だけだ!」

「風呂もありますか?」

「髭だ!」

こうして髭を剃ることになるのだが、理髪用の(今の美容の椅子と原型はまったく同じだ)椅子に腰掛け、背もたれを後ろに倒せると親父がすると、そのままひっくり返りそうになってしまふ。

「まだ馴れないものでして。シカゴから取り寄せたばかりなもので……」と、親父はばつが悪そうに言い訳をする。どうやら椅子は、今のようには固定するガッチリしたものはなかったらしい。ようやく落ちて椅子に座った途端、銃声が響き、バーバーのあちこちにも弾が撃ち込まれる。親父は店からい

NICHIBI

個性を伸ばし、活かし、引き出す熱い情熱がある
 厚生大臣指定／専修学校

校長・中村敏郎（東京女子医科大学名誉教授・医学博士）
 理事長・網倉宅一

B 日本美容専門学校

平成7年度 秋季(10月生)

夜間部
 専門課程/定員90名/1年半
 高等課程/定員60名/1年半
通信科
 通信課程/定員400名/2年

願書受付
 平成7年5月8日より
 定員になり次第締切ります。



〒169 東京都新宿区高田馬場1-21-12
 TEL(03)3200-0813(代表)

『荒野の決闘』(MY DARLING CLEMENTINE)

1946年/アメリカ

監督:ジョン・フォード

出演:ヘンリー・フォンダ、リンダ・ターネル、ヴィクター・マチュア、ウォルター・ブレナン、ティム・ホルト、キャシー・ダウンス

配給:フォックスビデオ

なくなってしまう。

「何て街だ、髭もゆつくり剃れないなんて!」
 あまりの騒ぎにアーブは憤然として、外の様子を見にでかける。騒ぎの原因は、酒を飲みすぎたインディアンが、バーから外に向かつて拳銃を乱射したためだった。街の保安官がおどけつついる中、アーブは颯爽とバーの横の階段から回ってインディアンを捕まえ、撃退することに成功する。こうして、再びバーの親父を探し出し、髭を剃る。

実は、このバーバーには、**デンティスト**という表示がある。つまり歯医者なのだが、昔は歯医者もバーバーが兼ねていたというところだったから、西部時代にも、まだ、その名残りがあつたのだろう。さらに風呂を親父がすすめているところを見ると、風呂まで備えていたことがわかる。クリント・イーストウッド主演の西部劇『奴らを高く吊せ』には床屋の風呂が登場するが、考えてみると、旅人を迎えるバーバーは、お洒落と医療とリフレッシュの場で、ちよつとしたリラクゼーションルームみたいなものだったのだろう。

さて、バーバーから出たアーブは、むさ苦しいカウボーイの顔から、整った髭をたくわえた精悍な顔つききの男に変わる。その後、キャンプに戻ると末の弟は何者かに殺され、牛

は盗まれている。この出来事を転機として、

アーブは再びトウームストーンに戻り、保安官となつて弟の復讐の機会を待つことになるのだが、そのきっかけになつたのがバーバーの髭剃りというお洒落だつたというわけだ。もう一つ、映画の中ほどに再びバーバーのシーンが登場する。今度は最初とはムードが違い、まるでゆつたりと時間が流れているかのように、のどかな雰囲気である。アーブが保安官になつてから、街の秩序も少しは変わり始めたらしい。今度は落ち着いて、ゆつくり髭も剃れる、ゆとりある状況になつている。バーバーの椅子で調整を終えたらしいアーブは、親父の差し出した鏡を覗き込んで、

髪に手をやりながらしかめっ面をする。
 「ちよつと変か…」
 「そんなことないです」

その言葉にアーブはすつと立ち上がり、帽子をさつちり被つて外に出る。椅子のことを気にしていた床屋の親父は、そこで「明日新しい椅子が来ます。カンザスシティの…」と伝えながら、アーブにシユツシユツと香水をかけるのである。外に出たアーブは、店の前で立ち止まり、ガラス窓に自分の姿を写して帽子に手をあて、満足そうに歩きます。そして食事を終えた兄弟に会うのだが、「何だか、

花の香りがするみたいだなあ」と言われ、照れたように「俺だよ。なに床屋のやつがね…」と答えるのだった。

床屋の外で佇んでいると、馬車に乗つた街の人が通りすがり、教会を建てる集まりに行かないかと誘う。しかしアーブは「仕事がある」と断つてしまう。その後、街を出ようとして、いとこのクレメンタイン(キャシー・ダウンス)に出会う。彼女はドク・ホリデイ(ヴィクター・マチュア)を慕つて街へやって来た女性なのだが、アーブは彼女に、密かに恋心を抱いているのだ。

「私、この街の朝が好きですわ、保安官。空気がきれいで澄んでいるし。砂漠の花も匂いますわ」

「私です。床屋のやつが…」
 「一緒してくださいませか。教会の集まりに行かれるんですよ」

「いいですとも。お連れするのは光栄です」
 こうしてアーブはすっかり有頂天になつて彼女をエスコートし、集会場のみんなの前でフォークダンスを踊り出す。何と微笑ましい光景だろう。

服装は人の行動を変えるとされるが、身だしなみもまた、人の行動を変える。そんなことを『荒野の決闘』は、教えてくれた。